

チャールズ・オルソン著,
 ジョージ・F・バタリック編, 平野順雄訳
 『マクシマス詩篇』(南雲堂, 2012年), 1457頁

岩田和男

オルソン (Charles Olson) の *The Maximus Poems* の全訳である。大部、大作と形容しただけでは不足だろう。費やされた時間20年を考えると頭が下がる。日本翻訳協会の翻訳特別賞授与の栄を受けたという事実もその偉業ぶりを証明するが、評者の言いたいのはそういう意味だけではない。「平野訳は日本語として必ずしもこなれているわけではない」という評があるが、そもそも翻訳という言葉が平野氏の業績をあらゆる適切な表現と言えるのだろうか。氏にも「翻訳も読み物である」(1427) という認識はあるが、それでも評者には、氏が本書を普通に読む読者の姿を想像しているとは思えない。本書を脇に置いて *The Maximus Poems* を英語で読むこと、それが、本書を手にした読者に何よりもしてもらいたいことなのではないか。そういう不思議な確信があるのだ。

全体のページ数に比して解説(22頁)の短さにも少し驚く。訳詩部分(1126頁)がとにかく膨大なので、全体の頁数を増やさないために解説は極力削除する必要があったかもしれない。しかし、訳注(268頁)は意外に長い。これでも削りに削った結果かもしれないが、頁数の極端な差を見ると、解説よりも訳注のほうが重要であることは明らかだ。しかも、その訳注は、いわゆる語の意味を全体と関連づけて文献学的に客観的に語るという、普通の意味での「注」の役割を踏み越えて、氏の主観的解釈が色濃く出ている。エリオット、パウンドの長詩が自注を特徴としていることは今更言う必要もない。そこを焦点に置くと、この訳注は「自己主張」の流れで捉えるべきものかもしれない。が、評者は敢えてそれとは違う存在意義をまずは指摘したい。

例として、冒頭も冒頭、第一行目というか、第二行目（または第三行目）に付された訳注（1138-1139）、とりわけマクシマスの出生地、誕生について述べた箇所を取り上げる。紙幅の都合で引用しないが、まさに訳注自体が解題となっている。氏の訳注とは、この詩を「読む」ことそのものだと了解できるのだが、実は、評者には「血液の中に隠れた島々」という比喩がどうにも理解できない。原詩を読んでみると、“hidden in the blood”という詩句を、その前にコンマはないものの、“islands”と“jewels and miracles”の間で宙吊りにしたいという作り手の意図が働いていそうなのはわかる。

もちろん、このような異論の可能性を氏をご承知でないとは思えない。「『島々』の言い換えが『宝石と奇跡』なのかどうか、決定不能である」（1138）と述べながらも、訳は「血液の中に隠れた島々のそば/宝石と奇跡のそばで、」（9）となっているからである。助詞「で」の存在を指摘するまでもなく、「島々」と「宝石と奇跡」が等意と解されているのは明らかである。このように、意味を決定させる「翻訳」という作業のために、訳注に示されたような決定判断を下す経緯を語らなければならないところに、現代詩翻訳の困難がある²。そもそも言葉の意味が一義的に決定できるかどうか怪しいのに、さらに積極的に、意図的に、意味の決定不能性を「遊ぶ」現代詩である。決定を信条とする翻訳とはある意味相容れない関係と言わざるを得ない。

決定不能性の影響はそれにとどまらない。先ほど、引用部分の行を指定する際に一行目というべきか二行目というべきかと、一風変わった言い方をしたが、それは、評者が一行目と呼ぼうとした箇所が普通ならタイトルと理解されるところだからである。パウンド以降の現代詩における長詩とは、一枚の写真のごとき短詩を並列的に並べることで、连接的な前後関係を作り出していく、イメージの発展型のような構成と言えるので、タイトルすらも詩の一部とするのがけっして珍しくない。したがって、引用例も、たとえ長詩の冒頭といえども、タイトルも含めて一行目と捉えるかどうかは、読者の解釈に委ねられるところとなる。しかも詩の本体は、このエピグラフ風の詩行が終わった後、1と題された第一節から始まる体裁となっている。

この構成は、「私、マクシマス」をなぜ二回も詩人は繰り返すのか、その真

意を私たちに聞かせないではおかないと評者は考える。その真意を問うために、私たちは歩いてその場面に立ち戻り、しばし熟考し、また進み、さらにまた別の角口で立ち止まって考え直さなければならない。まさに莫大な時間がかかるのが現代詩の翻訳という作業であるが、実は、その時間こそがこの訳書の「存在意義」に関わると評者は思う。

A Brief History of the Future: A Brave and Controversial Look at the Twenty-First Century という、重商主義的考え方がどのように世界史と関わって来たか、原始時代から説き起こし、その流れから21世紀がどのような経緯を辿るか推測した、ジャック・アタリ (Jacques Attali) による刺激的な一種の文明論がある³。フランス語の原著⁴は2008年のリーマン・ショックを言い当てたとして、日本でも一時期大変有名になったが、その現在に近い未来を語る一節に「時間」論がある。曰く、世界経済のグローバル化に伴い人々の活動もボーダーレスに広がり、地球が狭くなり、時間が短くなる。ものの生産から販売にかかる時間も短くなり、それに応じてあらゆる時間単位が短くなる。5年ごとに住む場所や働く会社を変える労働者が半分以上になり、夜や日曜に働くのが常態化する。そして、人々の行動はノマド化する、というのである (118-122)。人々は定住生活を諦めるわけだ。

ところが、こんなに時間が減少するのに、それに反比例して、知識とすべき情報は年々加速度的に増えていく。そして、手に入る情報を全部網羅しないと満足できない人々は、情報取得に時間をとられ、さらに時間が足らなくなる (123)。だから産業は、それら情報を「貯蔵することを勧める」ようになる (147)。結局、時間は誰も作れないし売れない、蓄積することもできない、真に不足する唯一のものであることが明確になる (同)、というのだ。時間の過ぎるのが早くなっていくと毎年実感している私たちは、まさに、アタリの予言する近未来を生きているのかもしれない。

詩を読む、あるいは対象は何であれ精読するとは、それとはまったく反対の時間を生きることである。平野氏の翻訳を脇に、オルソンの詩行を読み進んで

は立ち止まって考え、訳注を読み、詩に戻る。また立ち止まって、パウンドの『詩篇』を迂回し、またオルソンに戻り、進みつ戻りつする。まったく十分ではないが、そのための時間を拵えてみて、驚くほど楽しく充実した時間であることを評者は再認識できた。

そういえば、評者にとって現代詩を読むとは、昔から気が遠くなるほど時間のかかることだった。学生時代はそれだけの時間をかけられた。それが懐かしいと同時に、評者は今強く感じている。私たちが、そうとは気づくことなく、名古屋で英詩を読む、あるいは精読する伝統の中にいたことを。冒頭で言及した氏の訳詩という偉業の「存在意義」とは、この伝統の確認にほかならない。

苦情を少し。この一冊本は実は大変使いにくい。オルソンを専門にしない詩の読者にとって、平野氏の翻訳と訳注は、英語による注釈本をいちいち参照する手間が省けて有難い。参考書など様々に渉猟する必要はもちろんあるが、しかし、さしあたりこの一冊を、*The Maximus Poems*という大海原を読み進めるときの羅針盤として使えることの恩恵は計り知れない。ところが、実際に読みすすめて痛感するのは、「本片手に」というにはこの本が分厚すぎ、重過ぎることである。再版の機会が訪れたら、是非分冊をお考えいただきたい。

もう一つ注文がある。それは、先ほどの「私、マクシマス」が二度繰り返されていることに端無くもあらわれる「私」の自意識過剰と重なるが、その裏返しとしての「君」についてである。それについて平野氏は、解説の2の(一) 投射詩論の箇所、六節の冒頭、「中へ！ 中へ！ (In! In!) ……」で始まる印象的な一節を例に、ごく短くこう触れている。「『おまえ』は、鳥であり、グロスターの漁師であり、読者であると言ったが、『おまえ』の中に語り手マクシマスも含まれている(中略)。巣作りの哲学的考察の(三)の、魚の骨や、藁や意志から、鐘の音から、巣を作るとは、グロスターから巣を作ると言っているのに等しい。だから、『おまえ』には、「マクシマス詩篇」という巣を作ろうとする語り手が含まれる」(1414)。つまり、「おまえ」は君であり私であると言っていることになる。

この指摘は読者を混乱させるのではないか。いかに「投射詩」が「喉の奥で

起る^{プレス}息のドラマ」であって、観念ではなく、もっと身体に近い詩的感性を^{プロジェクト}投射する詩法であっても、「おまえ」はやはり鳥である。その鳥の巣が「力強く航海に出る」船の「船首斜檣」と「重ねられて」(1413) しようとも、またそれが、あらゆる読者に向けて「なるべき者になるよう……励ましてい」(同) しようとも、その詩的感性をもたらす「言葉」とその統語法は、「おまえ」を鳥以外のものとするのは比喩だと言っているように評者には思えるからである。

通常の意味での比喩だとは思わない。リズムや音などで構成される「場」に多くを依存した詩の全体性が語る比喩であろう。だからこそ、「語り手の伝達形式に身をゆだねる」という、いくらか秘儀めいた手法も必要となるのだろう。しかし、である。いかに「異様に多いコンマ、容易には読み取れない主語と修飾語の関係、意味の層の混在」(1414) であろうとも、私たちは、意味を言葉から、用いられている統語法から読み解くしかない。

もう一つ指摘しておきたい。二通目の手紙の三節に登場する「若い奴」が、「大男のグロスターマンの方を振り返って」言った言葉を、聞いている「おれ」が語る箇所である。この「おれ」は語り手オルソンで、昔住んでいた「小さな白い家」に、自分に馴染みのある土地フォート出身の「若い奴」が住んでいると知って感激しているらしいことが、訳注からわかる。文脈から「今」が鍵と読め、代は替われども住まう人の心の変わりなさ、不易流行が主題かと思った。

そういう二人が、とある日曜日、揃って「おかしな船を見」つける。すると、「だしぬけに、奴は、……大男のグロスターマンの方を振り返って『いつか、こいつを手に入れてやる』』と言うのだが、ここで私たちはパラドクスに突き当たってしまう。訳注には「大男のグロスターマン」はオルソンのこととある。しかし、「おれ」はグロスターのマクシマス、つまり「大男」のオルソンだったはずだから、ここの「若い奴」は「おれ」というオルソンと一緒に船を見ながら、その「大男のグロスターマン」であるオルソンに向かってこの船を手に入れると宣言する、ことになってしまう。しかし、もし「大男のグロスターマン」が「おれ」であるのなら、英語の統語法は“he turned to a Gloucesterman, a big one”と表現する、すなわち不定冠詞を使用することを許さないのではないか。つまり、「おれ」がオルソンなら「大男のグロスターマン」はオルソン

ではありません。その大男がオルソンなら「若い奴」が住んでいると知って感激する「おれ」はオルソンではないはずである。

「私」の自意識過剰は「私」と「おまえ」の自己増殖を生む。しかも、投射詩が場面依存であれば、その増殖はさらに避けられない。言い換えれば、「私」がマクシマスという名前を持つのであれば、それがオルソンという別名を持つ時は、そうでない時と峻別される必要はないのか、ということでもある。オルソンであり、かつそうではない、という意味の不定を「もて遊ぶ」ポストモダンな身振りまでをも、グロスターの詩人オルソンができてしまっているものだろうか。

詩を読む会をまた始めたくなった。自身のQOLのためにも。

注

¹ 田沼泰彦「いま全ての航跡が明かされる—『マクシマス詩篇』」<http://goldfish-press.com/archives/5978>, 2013年4月29日アクセス。

² 管啓次郎「翻訳された詩人の『風景』」参照。<http://www.yomiuri.co.jp/book/review/20120509-OYT8T00575.htm> 2013年4月29日アクセス。また『マクシマス詩篇』解説1425-28参照。

³ Translated by Jeremy Leggatt, New York: Arcade Publishing, 2009. 評者の引用は本書からのものである。

⁴ *Une brève histoire de l'avenir*, Librairie Arthème Fayard, 2006.